

創世記35－36章 「ヤコブの家とエサウ王国」

1A ヤコブへの約束 35

1B ベテルへの帰還 1－15

1C 偶像の遺棄 1－4

2C 神への祭壇 5－7

3C アブラハムからの継承 8－15

2B 父の家への帰路 16－29

1C ラケルの出産時の死 16－20

2C 十二人の子 21－26

3C イサクの寿命 27－29

2A エサウの繁栄 36

1B カナンの地での子ら 1－8

2B エサウの系図 9－43

1C 子の名 9－14

2C 首長 15－19

3C 先住民フリ人 20－30

4C 王たち 31－39

5C 領域 40－43

本文

創世記 35 章を開いてください。午前礼拝で学んだように、ヤコブの家にとてつもない悲劇が起きました。シェケムに今、いますが、そこで娘ディナがシェケムの首長の息子が凌辱し、妻にしようとしていました。そして、ディナの兄、シメオンとレビがシェケムの男に割礼を受けさせ、彼らが痛みを苦しんでいる時に、虐殺しました。しかも、女や子どもを奴隷にし、財産も略奪しました。ヤコブが、周囲の人々に嫌われものになってしまった、彼らのほうが数が多いと嘆いていましたが、シメオンとレビは、「妹が、遊女のようになっているのか。」と言って、全然、悪びれません。

1A ヤコブへの約束 35

1B ベテルへの帰還 1－15

1C 偶像の遺棄 1－4

そこで主が語られます。¹ 神はヤコブに仰せられた。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

主は、「立ちなさい」と言われます。シェケムに居留まるのをやめなさい、ということです。今の快

適なところにいるのをやめて、主に立ち返り、歩んでいきなさいということです。今、自分が罪や思い煩いの生活にいたら、そこから立ち上がりなさいということです。

そして、「**ベテルに上り**」なさいと言われます。別にシェケムよりベテルがことさらに、標高が高いわけではありません。しかし、「上る」というのは、そこに主がおられて、礼拝を献げることです。高い山に神の御座があり、そこに参拝に行くようなイメージです(イザヤ 3:2)。私たちが礼拝をするというのは、こういうことです。王であり主であられる方のところに上って行くのです。

そして、ベテルは、「**あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神**」を示しています。自分が人生で最も負い目に感じていたところに、まさに主からの大いなる栄光、そして神の確かな約束を与えられたところです。私たちが、恵みによって神に救われたことを思い出してください。自分の心が貧しくなって、初めて天の御国に入れるのです。

そして、「**祭壇を築きなさい**」と言われます。これまでも、ずっとアベルの時から、ノア、そしてアブラハム、イサクに至るまで、彼ら信仰の人々の特徴は、祭壇を築くことでした。犠牲をもって、献身的に献げることの意味しています。「**ロマ 12:1** ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたさげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」何か、お手頃に主への礼拝を済ませていくのではないのです。

² それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「**あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。**」

午前礼拝でお話したように、ヤコブは神に語られて悟りました。ベテルに上っていったいなかったために、周囲の人々が拝んでいた神々を取り入れてしまっていたということです。問題は周囲や環境にあったのでありません。自分たち自身が、その周囲にあるものを取り入れたからです。

思い出せますか、イスラエルがペリシテ人と戦う時に、戦地に契約の箱を持ってきました。それで、大歓声が起こったのですが、ペリシテ人がことごとくイスラエル人を打ちのめしたのです。そして神の箱までが、ペリシテ人に奪い取られました。ベテ・シェメシュに箱は戻ってきたのですが、なんとその蓋を彼らは開いてしまったので、数多くの人々が倒れて死んでしまいました。それで、長いこと、キルヤテ・エアリムの祭司の家に安置されていたのです。そして 20 年が経ちました。20 年です。そこでようやく、主を彼らが慕い求めたのです。(I サム 7:2-3) それで、彼らの間の異国の神々を取り除いて、ペリシテ人に打ち勝ちました。

先ほど、ロマ 12 章 1 節を読みました。自分のからだを、生けるいけにえとして献げなさいという

勧めです。続きにこう書いてあります。「12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」この世と調子を合わせるなということです。漠然と生きていれば、ただ型にはめられていく生活をします。能動的に、思いを一新させるのです。

そしてヤコブは、「身をきよめ、衣を着替えなさい」と言っています。着ている物やイヤリングなど、装飾品が異教の慣わしに模ったものでした。それを捨てなさいと言っています。これは、自分に身に付いている古い習慣を捨てなさいということです。そして、新しい習慣を身に着けることです。(エペ 4:22-24)

³ 私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう。」

ヤコブは、家族の人々にベテルに行こうと言っています。彼自身しか、ベテルの経験をしていません。けれども、彼は家のかしらとして、自分に与えられた信仰をもって、家族全体を引っ張ろうとしています。ついに、父としてのリーダーシップを発揮できています。彼のことは説得力があります。家族全員が、ヤコブがラバンの下で苦しみを経たことを知っています。彼らは、このような救いは、父の神によるものだと言ったのです。私たちも、主から与えられた信仰を、自分の周りの人々に伝え、分かち合っていくのです。

⁴ 彼らは、手にしていたすべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡した。ヤコブはそれらを、シェケムの近くにある檜の木の下に埋めた。

これだけのものを、彼らは身に着けていました。当時、こうした身に着けるものは、単なるきれいに着飾るだけでなく、異教の慣わしを行うためのものでした。そしてかつ、忌まわしい行いがそれらの儀式には付き物です。

ところで、偶像をヤコブの家の中に持ち込んだ最初の人覚えていますか？ヤコブの最愛の妻ラケルです。父ラバンのテラフィムを盗んで、それをらくだの鞍の中に隠しました。テラフィムは、偶像であり、かつ、財産権を示す置物でした。ラケルは、父にやり返したいと思って、奪い取られたのだから、奪い返してやると思って、これを盗んだのでしょうか、あまりにも軽率です。彼女に、主への恐れが足りなかったのです。

そして、シェケムに来て、ますます異国の神々が自分の家の中に入ってしまったのです。ちょうど、小さな穴が船の底に空いていたら、「小さい」という理由で放っていくことはないのと同じです。主

自身も、パウロも、それをパン種で言い表していました。「I コリ 5:6b わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。」わずかな妥協が、一気に全体に広がります。

ところで、「**櫨の木の下に埋めた**」とあります。櫨の木の姿が、聖書には数多く出て来ています。¹ その地域では、櫨の木はとても目立ちます。背丈は高くなく、低木です。けれども、元々、イスラエルの地ではすべてが低木なので、目立つのです。さらに、乾燥した気候と土壌でも、根を張って生き延びることができます。さらに、切り倒しても、さらに芽が生えて出てくる特質もあります。メシアが来られることのイザヤの預言に、主イエスのことが預言されていますね。「11:1 **エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。**」

アブラハムは、約束のカナンの地に入った時、モレの櫨の木のところに行きました(12:6)。イスラエルは日差しが強いので、木陰として櫨の木は適しているからです。そこに主が現れました。また、ヘブロンではマムレの櫨の木のそばに住んでいたとあります(13:18、14:13)。マムレは、アブラハムと盟約を結んだカナン人の有力者です。共に木陰で休むことができているので、平和を意味していました。後に、シェケムの櫨の木に、ヨシュアが神のみおしえの書を櫨の木の下に立てています(24:26)。櫨の木の寿命は非常に長く、耐久性があるので、主のことばが、いつまでも続くことを意味していました。

では、ここシェケムで、ヤコブが異国の神々や着物を櫨の木の下に埋めたのは、ここで捨て、葬ったことをはっきりと示すためでしょう。はっきりと、異国の神々やその慣わしから袂を分かťことを意味しているでしょう。自分たちが、あるいは後世の人々がここにきて、「ここでヤコブたちは、神々と袂を分かťのだ」と分かるために、櫨の木は目立ちますから、思い起こすことができます。

私たちキリスト者も、木において、罪から来た呪いを置いて来ています。そう、キリストが十字架の木につけられました。「ガラ 3:13 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。」「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。」罪が葬り去られた木として、覚えることができます。

2C 神への祭壇 5-7

⁵彼らが旅立つと、神からの恐怖が周りの町々に下ったので、だれもヤコブの息子たちの後を追わなかった。

これはすばらしいです。アブラハムとの祝福の契約が、ここで働いています。アブラハムが失敗をしている時にも、彼ではなく周りの人々が害を受けたり、妨げられていました。ヤコブは、嘆いて

¹ <https://israelbiblicalstudies.com/blog/category/holy-land-studies/two-biblical-trees>

いましたが、それは心配無用になりました(34:30)。主に立ち返った者には、だれが敵対できるでしょうか？「ロマ 8:31 神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」

⁶ ヤコブは、カナンの地にあるルズ、すなわちベテルに来た。彼とともにいた人たちもみな一緒であった。⁷ 彼はそこに祭壇を築き、その場所をエル・ベテルと呼んだ。それは、彼が兄から逃れたとき、神がそこで彼に現れたからである。

神がここで現れた時は、彼はたった一人でした。しかし今、ヤコブの家の者たちが一緒にいて、共に神を礼拝しています。

エル・ベテルは、「神、神の家」です。ここに神がおられるとして、ヤコブはここを神の家としましたが、今は、神ご自身がここにおられると、神を知ったことを記念しています。信仰的に成長しています。また、彼はシェケムに来た時、「エル・エロヘ・イスラエル(33:20)」と祭壇を呼びました。自分の名を入れていたのです。しかし、自分はいかに、愚かであったかを彼は悔い改め、今、すべてが神からの祝福なのだと、自分の名を排除し、神の御名をほめたたえているのです。

3C アブラハムからの継承 8-15

⁸ リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある榎の木の下に葬られた。それで、その木の名はアロン・バクテと呼ばれた。

なんと、リベカの乳母がヤコブたちと共にいました。自分の母を養育した人です。彼女は、ラバンの家において、リベカがイサクの妻になる時に、共に旅したはずです。そして、どこかの地点で、遠く離れたヤコブのところに来ていました。おそらくは、リベカが死んだからだと思われます。残された彼女が、自分の故郷でもあるハランに来たのだと思われます。けれども、再びカナンの地に戻ってきています。しかし、ここで亡くなりました。「アロン・バクテ」とは、「嘆きの榎の木」という意味です。みな、彼女を慕っていたのでしょう。乳母という存在、乳を飲ませるところからずっと世話をしている人は、このように慕われるにふさわしいです。

そして、再び榎の木の下に葬られています。ここでは、彼女のことを思い出すために、目印としての榎の木です。そして、彼女も神の約束の中に入っており、榎の木が切り倒されても、なおのこと生え出てくるように、彼女も、死んだけれどもよみがえるという希望も、あったのかもしれませんが。

⁹ ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再び彼に現れ、彼を祝福された。

かつて、ヤコブがベテルで天のはしごのところにおられた主によって祝福されたように、改めて神が現れ、祝福されました。御使いの姿か何かによって、現れたのでしょう。

そして、デボラが死んだのと関わりがないことは、ないでしょう。彼女を失った喪失感がいっぱい
の時に、主ご自身がありあまる祝福によって、慰めを与えておられます。かつて、アブラハムが、
甥のロトと別れた時も、主が彼に語り、大いなる約束の幻を与えました。主は、私たちに失われた
ことに気をかけてくださり、それを補い、あふれさせてくださいます。

¹⁰ 神は彼に仰せられた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名は、もうヤコブとは呼ば
れない。イスラエルが、あなたの名となるからだ。」こうして神は彼の名をイスラエルと呼ばれた。

ヤコブは新しい名イスラエルが与えられましたが、そこだけに与えられて、それからあまり、イス
ラエルという名を意識しなくなることも容易にできました。私たちが、もし、自分の救われたことを思
い起こし、覚えていなくとすれば、自分が救われているということ自体も、確信が薄れていき、
信仰から離れることさえあります。ですから、思い起こすことは非常に大事です。(Ⅱペテ 1:12)

¹¹ 神はまた、彼に仰せられた。「わたしは全能の神である。生めよ。増えよ。一つの国民が、国民
の群れが、あなたから出る。王たちがあなたの腰から生まれ出る。¹² わたしは、アブラハムとイサ
クに与えた地を、あなたに与える。あなたの後の子孫にも、その地を与えよう。」

主が、再び、アブラハムそしてイサクに与えられた約束を、ここでもはっきりとヤコブに伝えてい
ます。ここで興味深いのは、「全能の神」という名、エル・シャダイです。シャダイの元の言葉には、
「乳」という意味合いがあります。母のお乳を飲んでいいる赤ん坊の姿です。自分は一切を、神により
頼む存在だということです。そして、神は父なる方でありながら、母のような優しさがあるというこ
とです。リベカの乳母が死んだ後に、このようにご自身を読むことは、主がそのようにしてヤコブを支
える、ということ約束しておられます。

その神の取り扱いによって、確かに一つの国民が、国民の群れが出てくるのです。王たちまでが
出てきます。そして、カナンの地が確かに、ヤコブにも、その子孫にも与えられます。今は、「土地
の約束は関係がない。キリストが約束の土地なのだ」という発言を聞いたことがありますが、とん
でもないことです。土地への約束はそのまま、今のイスラエルの地に対するものです。

¹³ 神は彼に語ったその場所で、彼を離れて上って行かれた。

ここから、神が目に見える形で現れたことが分かります。降りてきて、また上っていかれました。
神の御使いとして来られたのではないか？と思います。

¹⁴ ヤコブは、神が自分に語られた場所に、柱を、石の柱を立て、その上に注ぎのぶどう酒を注ぎ、
さらにその上に油を注いだ。¹⁵ ヤコブは、神が自分と語られたその場所をベテルと名づけた。

初めの時は、石の柱を立てて、その頭に油を注ぎましたが、ここでは、「**注ぎのぶどう酒を注ぎ**」とあります。これは、自分のいのちを注がれるような意味合いがあります。パウロは、第二テモテで、皇帝によって死刑判決が出て、執行される前にこの手紙を書きましたが、「**私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。(3:6)**」と言っています。そして、油注ぎは、聖別されているような意味合いがあり、神のものにされているということです。

そして改めて、ここをベテルと名づけました。残念ながら、ベテルは偶像礼拝の現場になっていくようになります。北イスラエル王国の初代王ヤロブアムが、ベテルとダンに金の子牛を造り、安置させました。ホセアやアモスなど、ベテルに対して厳しい裁きの宣言をしましたが、それは偶像を拝んでいたからです。「アモ 3:14 **まことに、イスラエルの背きのゆえにわたしが彼の上に報いる日に、わたしはベテルの祭壇を罰する。その祭壇の角は折られ、地に落ちる。**」

時を経ると、偶像から離れて生ける神に立ち返る場所であったところが、偶像礼拝を戻するという皮肉があるのです。イスラエルの神に対して献げていても、異教の神々も表面的には同じように、献げているからです。その違いを見分けるのは、「実」です。その人の生活から言動から、礼拝しているのが誰だかが、如実に現れます。自分はイエスをほめたたえと言いながら、兄弟を裁いて、憎んでいるのであれば、その人はまだ神を知らない、永遠のいのちは留まらなないと、ヨハネは第一の手紙で断言しています。

2B 父の家への帰路 16－29

1C ラケルの出産時の死 16－20

¹⁶ 彼らはベテルから旅立った。エフラテに着くまでまだかなりの道のりがあるところで、ラケルは出産したが、難産であった。

ヤコブは、ついにベテルまで来て、神への誓いを果たしました。この後、さらに旅を続けました。それは、ヘブロンにいるイサクのもとに行くためです。南に動いているうちに、リベカだけでなく、最愛の妻、ラケルを失います。人生は、喜びもあれば、悲しみも同時にあります。罪から死が入ってきましたが、キリストがよみがえり、再び来られる時に復活する日が来るまで、私たちは、このうめきの中に生きています。今日は結婚式だったのに、次の日は葬儀だということはあるでしょう。

ヘブロンに行くには、その前にエフラテ、すなわちベツレヘムを通ることになります。ベツレヘムへの道のりで、ベツレヘムからまだ距離があるところで、ラケルが出産しましたが、難産でした。今のように出産の時の母の死亡率は低くありません。そして、もうこの時は、ラケルも高齢であり、高齢出産でしたから、難産はなおさらのことでした。

¹⁷ 彼女が大変な難産で苦しんでいたとき、助産婦は彼女に、「恐れることはありません。今度も男

のお子さんです」と告げた。¹⁸ 彼女が死に臨み、たましいが離れ去ろうとしたとき、その子の名をベン・オニと呼んだ。しかし、その子の父はベニヤミンと名づけた。

「ベン・オニ」とは、「苦しみの子」という意味です。これから苦しみの子と呼ばれるのは忍びないとヤコブは思ったのでしょう、ベニヤミン、すなわち「右手の子」と名づけました。右の手は、主ご自身が力強い働きをする時に、しばしば用いられる言葉です。権威と力を示しています。例えば、出エジプトで右の手が働いていました（出 15:6）。イエスが、パトモス島で栄光に輝くお姿で現れた時に、教会を示す星を右の手の中に入れていました。

ところでラケルにとって、子が与えられることは悲願でした。レアが子を産み、自分に与えられないので、ヤコブに、「私に子どもを下さい。でなければ、私は死にます。（30:1）」と言っていました。そして、ついにヨセフが与えられました。ヨセフの意味は、「加える」という意味のヤサフから派生したのですが、「主が男の子をもう一人、私に加えてくださるように。（30:24）」と言って、名づけました。主はその願いを聞かれましたが、実に自分のいのちを失うという犠牲を伴いました。

¹⁹ こうしてラケルは死んだ。彼女はエフラテ、すなわちベツレヘムへの道で葬られた。²⁰ ヤコブは彼女の墓の上に石の柱を立てた。それはラケルの墓の石の柱として今日に至っている。

今、ユダヤ教徒の間では、ベツレヘム近郊にラケルの墓というところがあり、そこで祈りを献げています。しかし、聖書の記述では、ベツレヘムへの道で葬られたとあり、サムエル記第一 10 章 2 節には、「ベニヤミンの領内のツェルツァフにあるラケルの墓」とあります。ベツレヘムはベニヤミンではなく、ユダの領内です。サムエルの町ラマの近くにありました。

しかし、この「ベツレヘムへの道」ということから、預言において大事な分岐点となっていきます。エレミヤが預言しました。「31:15 【主】はこう言われる。「ラマで声が聞こえる。嘆きとむせび泣きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。その子らのゆえに。子らがもういないからだ。」この預言は、バビロン捕囚が背景にあります。エルサレムにいる男たちが、バビロンによって捕らわれの身となります。それを泣いて見守る母たちの姿が、預言されています。

そしてこの預言が、イエスがお生まれになったベツレヘムで、ヘロデ大王によって、二歳以下の男の子が虐殺されることを指し示していたのです。「マタ 2:18 ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」

したがって、一連の流れ、すなわちラケルが子を産み、死んでしまったこと。その結果、神の右の手という名が与えられたベニヤミンがいます。ここからバビロン捕囚の悲しみがありました。しかも、オバデヤの預言によれば、エドム人は同盟を結んでいたにも関わらず、何もせず、かえってバ

ピロンに捕え移されるのを喜んでいました。

そして、イエスご自身が生まれ、この方は神の右の手となりました。神の権威と力を表し、今は、神の右の座に着いておられます。しかし、その子がベツレヘムで生まれたことによって、ユダヤ人の男の子たちが殺されるという悲劇があります。殺したのは、エサウの末裔、イドマヤ人のヘロデ大王です。36 章で、エドム人が力を持って繁栄する系図を見ていきます。

2C 十二人の子 21-26

²¹ イスラエルは旅を続け、ミグダル・エデルを過ぎたところに天幕を張った。²² イスラエルがその地にとどまっていたころ、ルベンが父の側女ビルハのところに行って、彼女と寝た。イスラエルはこのことを聞いた。ヤコブの子は十二人であった。

ミグダル・エデルは、ベツレヘムを少し越したところにあります。

そしてラケルの死があって、そこに一種の霊的空白が起こったのでしょう。ルベンは、ラケルの女奴隷ビルハのところに入りました。父の妻やそばめと寝ることは、父の権威を押しつけて、自分が権威者になることを意味しています。アブサロムが、自らがエルサレムの王となるため、ダビデのそばめ十人と、白昼堂々、寝ました。ダビデの権力を奪ったことを意味していました。人が死ぬとかすると、生き残っている人々が本当は何を思っていたのか、その心があらわにされます。

ヤコブはこのことを覚えていて、十二人の息子に対して預言をした時、ルベンが長子の権利を失ったことを宣言します。「49:3-4 ルベンよ、おまえはわが長子。わが力、わが活力の初穂。威厳と力強さでまさる者。4 だが、おまえは水のように奔放で、おまえはほかの者にまさることはない。おまえは父の床に上り、そのとき、それを汚した。——彼は私の寝床に上ったのだ。」水のような奔放さがあるとのこと。主にあって、しっかりとしなさいというのが、神の私たちへの命令です。目の前のことで、ああだこうだと動いて、主から離れていつてはならないのです。

²³ レアの子はヤコブの長子ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン。²⁴ ラケルの子はヨセフとベニヤミン。²⁵ ラケルの女奴隷ビルハの子はダンとナフタリ。²⁶ レアの女奴隷ジルパの子はガドとアシェル。これらはパダン・アラムで生まれたヤコブの子である。

イスラエルの十二人の息子の名が列挙されました。ここから、十二部族が生まれます。

3C イサクの寿命 27-29

²⁷ ヤコブは、キルヤテ・アルバ、すなわちヘブロンのマムレにいる父イサクのところに着いた。そこは、アブラハムとイサクがかつて寄留していたところである。

イサクは生きていました。自分の目が見えなくなって、それで死期が近いと思って、エサウを祝福しようとしたのです。ヤコブが奪い取って、エサウから恨まれて、それで逃げました。二十数年、三十年近く経っています。彼はまだ生きていました。そして場所は、ヘブロンのマムレであります。その畑地を墓地として、アブラハムが私有したところです。

²⁸ イサクの生涯は百八十年であった。²⁹ イサクは年老いて満ち足り、息絶えて死に、自分の民に加えられた。息子のエサウとヤコブが彼を葬った。

ヤコブは、108 歳の時、イサクが 168 歳の時に戻ってきています。したがって、死んだのが 180 歳なので、さらに 12 年、ヤコブは父イサクのところにいることができました。確かに、「**年老いて満ち足り**」であります。そして、「**自分の民に加えられた**」という言葉、これは神のものとされた民という意味合いがあります。アブラハムの死にも使われました。

そして、葬儀の時、ちょうどアブラハムの死でイサクとイシュマエルが共に葬ったのと同じように、今は、イサクをエサウとヤコブが葬っています。すでに、エサウはセイルに住んでいますが、そのいきさつは次の 36 章に書いてあります。

2A エサウの繁栄 36

次はエサウの歴史です。ヤコブの歴史が始まる前に、エサウの歴史をモーセは書き記します。大事なものは、エサウに対する預言は、呪われているものでした。(27:39-40)しかし、36 章を見れば、そうではなさそうに見える姿があります。

1B カナンの地での子ら 1－8

¹これはエサウ、すなわち エドムの歴史である。

創世記の「歴史」の記述が新たになります。これまでは、イサクの歴史でした。ここからは、エドムの歴史です。

² エサウはカナンの女の中から妻を迎えた。すなわち、ヒッタイト人エロンの娘アダと、ヒビ人ツイブオンの娘アナの娘オホリバマ、³ それにイシュマエルの娘でネバヨテの妹バセマテである。

エサウが、カナンの地にいた時のことです。しかし、26 章 34-35 節を見ますと、違う名前になっています。「26:34-35 エサウは四十歳になって、ヒッタイト人ベエリの娘ユディトと、ヒッタイト人エロンの娘バセマテを妻に迎えた。35 彼女たちは、イサクとリベカにとって悩みの種となった。」遊び相手の女で、とっかえひっかえしていたのではないかと想像します。あるいは、死別したのかもしれませんが。特に同じ父エロンを持つ、アダとバセマテは姉妹ですが、バセマテが死に、その後

で妹アダが嫁いだということは、あり得ます。正式の妻となったのが、ヒッタイト人の妻アダと、ヒビ人の娘オホリバマということでしょう。

そして、イシュマエルの娘も名前が違います。「28:8-9 さらにエサウは、カナン⁴の娘たちを、父イサクが気に入っていないことを知った。9 それでエサウはイシュマエルのところに行き、今いる妻たちのほかに、アブラハムの子イシュマエルの娘で、ネバヨテの妹マハラテを妻として迎えた。」マハラテも、バセマテもネバヨテの娘なので、マハラテと死別して妹バセマテが代わりに妻になった、ということはありません。

⁴ アダはエサウにエリファズを産み、バセマテはレウエルを産み、⁵ オホリバマはエウシュ、ヤラム、コラを産んだ。これらはカナンの地で生まれたエサウの子である。

カナンの地で生んだ子たちの名前です。

⁶ エサウは、その妻たち、息子と娘たち、その家のすべての者、その群れとすべての家畜、カナンの地で得た全財産を携え、弟ヤコブから離れて別の地へ行った。⁷ 一緒に住むには所有する物が多すぎて、彼らの群れのために寄留していた地は、彼らを支えることができなかったのである。⁸ それでエサウはセイルの山地に住んだ。エサウとは、エドムのことである。

ちょうどこのことは、かつて、アブラハムとロトの間で起こりました。自分たちの羊や牛を放牧するには狭すぎて、それで、エサウのほうからセイル地方に出て行きました。ヤコブがこの地を受け継ぐことを彼は知っていたので、自らそうしていったのでしょう。

こうやって、エサウは、「兄が弟に仕える」ということには全くなりませんでした。むしろ、ヤコブの羊ややぎ、牛よりも、もっと多く持っていたかもしれません。ヤコブがエサウに会う時に、「あなた様のしもべ」と呼んでいましたが、それはへつらっているのではなく、事実、力をもっていた豪族にすでになっていたと考えられます。

ここから分かるのは、「神をないがしろにする、不信仰な者が栄えることがある」ということです。しかも、神を恐れている人々よりも栄えているかもしれないということです。

2B エサウの系図 9-43

1C 子の名 9-14

⁹ これは、セイルの山地にいたエドム 人の先祖エサウの系図である。

8 節までは、カナンの地における系図でしたが、ここ 9 節から、セイルの山地にいたエドム人とし

ての系図です。「山地」とありますが、これは死海の南に、紅海にまで広がる、はげ山の一帯です。エドムの都にもなったボツラもあります。今のペトラとも言われています。そしてイエスが、オリーブ山で弟子たちに対して、荒らすいまわしい者が聖なる所に入るのを見たら、「ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。(マタイ 24:16)」と言われたのは、このセイルの山地ではないかと思われます。

¹⁰ エサウの子の名は次のとおり。エサウの妻アダの子エリファズ、エサウの妻バセマテの子レウエル。¹¹ エリファズの子はテマン、オマル、ツェフォ、ガタム、ケナズである。

エサウの子の名が連なっています。ここで注目すべき人は、「エリファズ」そしてエリファズの子「テマン」です。というのは、ヨブ記に、ヨブの友人として「テマン人エリファズ」が出ているからです。(2:11)エリファズがテマンの父でしたが、そのテマンの名に合わせて、その町あるいは地域の名がテマンになったのだと思われます。

そして興味深いのは、ヨブがいたのは「ウツの地(1:1)」であることが分かっていますが、そのウツが、エレミヤの哀歌の中で「ウツの地に住む娘エドムよ(4:21)」とあることです。33 節には、エドムの王の中に「ヨバブ」がいることが分かっていますが、このヨバブという名は、ヨブ本人ではないか？と言う人たちもいるほどです。

つまり、あの知恵に満ちた、ヨブと友人たちの対話は、エドム人の間で交わされていたと考えられます。驚くことに神をないがしろにした俗悪な人、エサウの子孫の中に、あれだけ神を敬っている知恵者がいたということです。

自分の目に正しいことしか行っていなかった士師の時代、ベツレヘムにはボアズという、主を敬う人がいました。ナオミと共にやって来た、モアブ人ルツと結婚しますが、主の祝福をベツレヘムの人たちは宣言します。士師の時代のような暗黒に、光が灯されていたのです。同じように、エドムの子孫や、エドム人の地に、ヨブのような人がおり、友人たちのような人たちがおり、曲がりなりにも神を恐れていたことが分かります。私たちも同じように、どんなに暗黒が覆っても、そこでも光として輝くことができるのです。

¹² ティムナはエサウの子エリファズの側女で、エリファズにアマレクを産んだ。これらはエサウの妻アダの子である。

ヨブ記に登場するエリファズだと思われますが、なんと、アマレクはこのエリファズの息子でした。アマレク人こそが、イスラエルの敵となり、モーセ率いる荒野の旅で、弱っている人々を狙って戦いを挑んだ者たちです。主が彼らに対して戦うと宣言されました。サウルは、サムエルを通して、アマレク人を聖絶せよと命じられていましたが、それをしなかったことで、彼は王位が退けられました。

神を敬う親を持っていますが、その真逆の道を歩む息子というのは、聖書の中にも数多く出てきます。

¹³ レウエルの子はナハテ、ゼラフ、シャンマ、ミザで、これらはエサウの妻バセマテの子であった。

¹⁴ ツィブオンの娘アナの娘である、エサウの妻オホリバマの子は次のとおり。オホリバマはエサウに、エウシュとヤラムとコラを産んだ。

レウエルの子の名が連なっていますが、つまりエサウにとっては孫です。そして他の妻、オホリバマの子の名が書かれています。

2C 首長 15-19

¹⁵ エサウの子で首長は次のとおり。エサウの長子エリファズの子では、首長teman、首長オマル、首長ツェフォ、首長ケナズ、¹⁶ 首長コラ、首長ガタム、首長アマレクである。これらはエドムの地にいるエリファズから出た首長で、アダの子である。

ここでは、エサウの子たちが、そのままその地域の首長になっているということです。

¹⁷ エサウの子レウエルの子では、次のとおり。首長ナハテ、首長ゼラフ、首長シャンマ、首長ミザ。これらはエドムの地にいるレウエルから出た首長で、エサウの妻バセマテの子である。¹⁸ エサウの妻オホリバマの子では、次のとおり。首長エウシュ、首長ヤラム、首長コラである。これらは、エサウの妻で、アナの娘であるオホリバマから出た首長である。¹⁹ これらはエサウ、すなわちエドムの子で、彼らの首長である。

それぞれの子また孫が、セイルの山地で首長になっているのですから、相当な影響力のある家系になっています。

3C 先住民フリ人 20-30

²⁰ この地の住民フリ人セイルの子は次のとおり。ロタン、ショバル、ツィブオン、アナ、²¹ ディション、エツェル、ディシャンで、これらはエドムの地にいるセイルの子フリ人の首長である。

20 節から 30 節は、エドム人が征服する前の、先住民フリ人の系図です。エドム人は、彼らを追い出して、セイルの山地に住んでいったのです。(申 2:12)エドム人が強かったということです。

²² ロタンの子はホリ、ヘマム。ロタンの妹はティムナであった。²³ ショバルの子は次のとおり。アルワン、マナハテ、エバル、シェフォ、オナム。²⁴ ツィブオンの子は次のとおり。アヤ、アナ。これは、父ツィブオンのろばを飼っていたとき、荒野で温泉を見つけたアナである。

荒野に温泉を見つけた、ということですが、今のヨルダンで、死海の東に「マイン(Ma'in)温泉」というものがあります。

²⁵ アナの子は次のとおり。ディションと、アナの娘オホリバマ。²⁶ ディションの子は次のとおり。ヘムダン、エシュバン、イテラン、ケラン。²⁷ エツェルの子は次のとおり。ビルハン、ザアワン、アカン。

²⁸ ディシヤンの子は次のとおり。ウツ、アラン。

ここまでが、フリ人セイルの子たちの系図です。

²⁹ フリ人の首長は次のとおり。首長ロタン、首長ショバル、首長ツイブオン、首長アナ、³⁰ 首長ディション、首長エツェル、首長ディシヤン。これらは、セイルの地での首長ごとに挙げた、フリ人の首長である。

フリ人たちも、すでに首長らを持っていました。その首長たちを根絶やしにして、残りを追い出したのがエドム人ということです。

4C 王たち 31-39

³¹ イスラエルの子らを王が治める以前、エドムの地で王として治めた者は次のとおりである。

エドム人は首長制だけでなく、なんと王政へと早い時期から移り変わっていました。イスラエルの子らは、サウルから王政が始まりました。しかし、モーセが荒野の旅でエドムの地を通過させてくださいとお願いした時、すでに「モーセはカデシュからエドムの王のもとに使者たちを遣わして言った」とあります(民数 20:14)。

³² ベオルの子ベラはエドムで治めた。彼の町の名はディンハバであった。³³ ベラが死ぬと、ボツラ出身のゼラフの子ヨバブが代わりに王となった。

このヨバブが、ヨブのことではないか？という意見があります。

³⁴ ヨバブが死ぬと、テマン人の地から出たフシャムが代わりに王となった。³⁵ フシャムが死ぬと、モアブの野でミディアン人を打ち破った、ベダデの子ハダドが代わりに王となった。その町の名はアウテであった。

エドム人の王が、ミディアン人と戦ったようです。

³⁶ ハダドが死ぬと、マスレカ出身のサムラが代わりに王となった。³⁷ サムラが死ぬと、レホボテ・

ハ・ナハル出身のシャウルが代わりに王となった。³⁸ シャウルが死ぬと、アクボルの子バアル・ハナンが代わりに王となった。³⁹ アクボルの子バアル・ハナンが死ぬと、ハダルが代わりに王となった。彼の町の名はパウであった。妻の名はメヘタブエルで、メ・ザハブの娘マテレデの娘であった。

このように、エドムの王たちが列挙されています。次々と王たちが出てきましたが、エドム人は、世襲制ではないようです。血縁関係ではなく、選出されています。

5C 領域 40-43

しかも、その王たちの地域もいろいろで、それぞれの時代で都も変わっていった、ということでしょうか。最後に、エドム人の支配する領域が書いてあります。

⁴⁰ エサウから出た首長の名は、その氏族とその場所ごとにその名を挙げると次のとおり。首長ティムナ、首長アルワ、首長エテテ、⁴¹ 首長オホリバマ、首長エラ、首長ピノン、⁴² 首長ケナズ、首長テマン、首長ミブツアル、⁴³ 首長マグディエル、首長イラム。これらはエドムの首長であり、所有地で住んでいた場所ごとに挙げたものである。エドム人の先祖はエサウである。

これらの名は場所の名でもありました。

そして最後に、「エドム人の先祖はエサウである」とあります。これは、ものすごい勢力と繁栄です。次の節は、こう始まります。「さて、ヤコブは父の寄留の地、カナンの地に住んでいた。(37:1)」全く、全然、栄えていないという対比であります。祝福されて、豊かにされていますが、それでも、エサウの子孫の栄えと比べれば、あまりにも質素です。

これが、まさに著者モーセが意図していたことではないでしょうか？それは、「世の栄えは過ぎ去るが、神の約束と祝福は実りが大きい」ということです。実が結ばれるということは、非常に質素です。しかし、必ず多くの実を結びます。ヤコブの子孫は、大いなる国民になるという神の約束が与えられていました。そして、それが事実そうなり、エドム人たちは従属することになり、最後は、この地上からエドム人というものの自体が過ぎ去ります。しかし、イスラエル人は今や、国家にまでなっているのです。主ご自身が、イザヤ 11 章で根株から出ている木の若枝に喩えられていました。非常に小さいものです。しかし、すべての国々が仕える王なるキリストになられるのです。

世の栄えを見れば、自分のしていることが空しく感じる場合があります。詩篇の著者は、自分がつまずきそうだと告白していますが、「それは、私が悪しき者が栄えるのを見て、誇り高ぶる者をねたんだからだ(73:3)」ということです。しかし、その悪しき者は、たちまち滅ぼされることを聖所に入って、悟ります(18-20 節)。私たちも、世の栄えは草のようにしぼみませんが、みことばを信じる者が永らえると知っています。